

韓国と北朝鮮は本当に統一できるのですか？  
はい。しかも、あなたが思っているよりもずっと早く！ -

韓 基 徳

韓基徳事務局長のウリ民族大会滞在記

去る6月14日から17日にかけて、仁川の文鶴競技場を主会場に開催された『6.15共同宣言4周年記念ウリ民族大会』に都相太理事長と参加してきた。

帰ってきた後、まだその興奮も冷めやらないうちに、ある大学生と交わした会話を表題とした。

私の返答は、確信に満ちたものであった。

得心が行かない彼に私はこのように説明した。

『72年の7.4共同宣言の頃と今では、情勢がまったく違う。当時は、デタントの機運があったとはいえ東西冷戦が基調にあったし、南北朝鮮はその最前線に位置し続けていた。何より北も南も民族相殺の悲惨な朝鮮戦争の記憶から自由ではなかった。それに加えて、南北の経済状態も決してよくなかったが、しかし拮抗していた。

しかも、双方の統一政策の基調は、滅共統一と解放統一という言葉で表現されていたように、イデオロギーを前面に出して、統一の相手の存在を全面否定するものであった。』

『2000年の6.15共同宣言は、姜萬吉先生が世界に寄せた文章で言っているように、統一の目的や方法がまず違っている。それは、“協商統一”という言葉で表現されていたように民族相生の実利を重視したものである。

国際環境や経済環境は大きく変化し、いずれも南側が圧倒的優位に立つに至っている。

何よりも重要なのは、南は世界中の誰であれ否定出来ないほどに民主化闘争に勝利したことだ。北側も南側に対して、以前のような対南戦略は放棄する以外になくなったのである。』

『さて、しかし私が確信を持っている最も大きな理由は、最近の経験によるのだ。それは、ついこの間私自身が三千里鐵道の代表と一緒に参加した、ウリ民族大会でのことなのだ。

この大会には南側から1200人余り、北側から103人、海外から57人の代表団が参加して開催されたのだが、私が北側代表団といろんな形で交流した中で感じ取ったものこそが、私の確信を強めるものだったのだ。

彼らは間違いなく統一を熱望している。彼らは北がいかに貧しくとも富裕層に属して

いるに違いないのだが、その彼らから北の体制賞賛やイデオロギーの匂いはほとんど感じられなかった。

こんなことは大きな声では言えないことなのだが、彼らは南に対して大変な共感を持っていて、精神的な意味では統一の“覚悟”が出来ているのだ。』

『では南のほうはどうであるのか。4月の選挙はまさに市民革命と呼ぶにふさわしいものだった。この選挙で、分断時代を終わらせようとする若い人々が大半当選した。与党であるウリ党対ハンナラ党の闘いで与党が勝利したというような日本の新聞報道の理解は完全に間違っている。

分断時代の継続か、統一の大門を開くのかという選挙で、統一勢力が勝利した選挙だったのだ。

与党も野党も統一勢力が実勢を握っている。9月には国家保安法が撤廃されることがほぼ確実な情勢だし、この大きな流れはもう後戻りは出来ないのだ。

そう、南の人々も統一の“覚悟”は出来ているのだ。』

『君の疑問は、どういう形で統一されるかっていうことだろう。そう、それはわざわざ言わなくてもいいことだよ。君が願っているように、そして私が願っているように、そのような形で統一されるのだよ。問題はいかにソフトランディングするか、だろう？

統一への道のりは、決まったいくつかの段階を確実にステップしながら最後のステップで統一されるなんていうものじゃあない。いくつかのステップを踏んでいるうちに、それこそ、その日は突然やってくるのだよ。

問題は、南北の人々が、その日を迎える“覚悟”があるか無いかということなのだ。そして、それは“ある”のだよ。』

初めて出会った北の人々は、まがいもなく同胞であった。私の中にある“分断意識”を思い知らされながらも、おずおずと会話を交わしたのだが、思いが詰まって何を話していいかもわからなかった。

いわゆる“美女軍団”を前にして、いかにももったいないことであった。

今回のウリ民族大会には、在日から、総連、民団、韓統連、在日韓国青年同盟、在日コリアン青年連合そして三千里鐵道のそれぞれの代表が参加した。こんなことは、一緒に住んでいるこの日本の地でこれまで実現することは無かった。

祖国の分断状況に翻弄されて、在日も分断意識を深く刻んできたのだが、祖国の状況の変化に促されて在日の中でも統一機運が高まっていくことを念願している。

大会に参加した、とある団体の、とある方は、「祖国がどうであれ、在日は在日として・・・」などと言っていたが、そんなのは絵空事としか思えない。

南の民主化闘争に背を向けてきた人(団体)が、祖国の情勢変化を素直に受け入れられずに、祖国からますます遠ざかっていく、そんな図式が透けて見える。

もう片方で、とある団体は果たして海外同胞の代表であったのかという疑問がある。彼らは自分の意識を完全に片方の祖国に同化していた。

実際、海外代表 57 人の中にはカウントされていなかった。

在日の“遅れ”は目を覆うばかりなのだ。